

熊野の  
木林から

# 怪野の熊野

## 「山の神と獅子垣」

其の(三)

和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦教授



江戸時代の代表的な農書のひとつ「成形図説」に記録された獅子垣の様子。壊れた獅子垣からシカとイノシシが入り込んで田を荒らしている。また、鉄砲を持った獵師と駆除を依頼する農民の姿が描かれている。(国会図書館近代デジタルライブラリーより転載)

山の神は、全国に祀(まつ)られる日本人になじみ深い神だ。一般には女神であり、その姿は醜く、オコゼと称されることもある。山が女人禁制なのは、醜女(しこめ)である山の神が、どんな女性を見ても自分より美しいことから妬(や)きもちを焼くと伝えられている。山の神には、農村と山村では扱いに違いがある。農村では田の神と同一であり、農耕に欠かせない

水を守る益神として大切に祀られてきた。一方、獵師、木樵(きこり)、炭焼きなどを生業とする山民にとっての山の神は、常に山に居て、生活や仕事場である山そのものや、さまざまな資源、例えば、燃料、材木、食糧、動物などの守護神として祀られてきた。山の神が暮らす神域を犯すと、その祟(たたり)によって災害が起こったり、水が涸(か)れたり、野生動物が大挙して村に侵入して深刻な獣害に見舞われたりする。鉾山の多かった熊野では、鉾山資源の守護神としての役割も担っていたようだ。

ところが、近年は、人々は山の神が暮らす深山まで開発、植林し、その祟りのせい、各地で災害が多発。獣害も深刻な社会問題となっている。獣害が深刻になった背景は野生動物の異常増加が原因だと考える人もいるが、一部の動物研究者は違う見方をしている。というのは、江戸期の野生動物の生息数は現在よりも多かったと推定されているからだ。明治後半から昭和にかけて野生動物が著しく減少し



那智山周辺に今も残る獅子垣。文化財としての価値も高く、ますます深刻化する獣害対策としても補修、再生することが期待される。

たため、古老に記憶のある昔ですら目立った獣害はなかったが、近年になって生息数が「回復」し始め、再び獣害問題が深刻化し始めたという。その証拠として、例えば江戸時代の絵図に動物よけの獅子垣が描かれ、昔も獣害が深刻であった様子が記録されている。

獅子垣は熊野の山中でも非常に多くみられ、那智山周辺だけでも総延長60キロを超えるという。動物よけではなく、砦(とりで)であったという説もあるが、少なくとも動物よけの効果はあったとみられる。この長大な獅子垣を造ってまでして獣害を軽減していた先人の苦勞を見直すなどし、山と人の付き合い方を再考する必要がある。理屈抜きで自然を尊敬する山の神信仰が存在したのだから、今も尊敬の念を再び持つことが重要ではなからうか。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師。12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

